

東洋史研究

第五卷
號

昭和十五年六月發行

賈の起原に就いて

宮崎市定

一

嘗て小島祐馬博士は東亞經濟研究第二十週年記念號誌上に、「原商」なる論文を載せられて、商人、商業などいふ時の商字の起原を明かにせられた。此によれば、商は殷王朝の別名商より出で、商が周に亡ぼされたる後、政治的勢力を失へる商の遺民が、その計數上に優れたる才能を利用して廣く諸方に行販を營み、それよりして行販者が商人と呼ばれ、更に廣く一般賣買行爲が商と稱せらるゝに至つたのであると云ふ。

商字と共に、古くより賣買販鬻を意味する言葉に賈といふ字があつて普く用ひられた。或は行販に商字を用ふるに對して、坐賣を賈と云ふやうに、區別さるゝ時もあるが、この區別は左程嚴重でなく、行賈といふ使ひ方も一方にある。私のこの小論に於いては、商字と共に、廣く商賣、及び賣買業者の意味に用ひられたる賈といふ文字及び言葉、即ち形と音との起原に就いて若干の考察を試みようとする。猶最初から手品の種明しをするに類するが、大體の方針は、賈字の發音が、公戸切、音古にして、全く鹽なる文字の發音と同一なることよりして、賈

なるものは、その起原に於いて鹽の賣買に關係ありしものなることを論證しようとするものである。

二

擬賣字は説文第六編下貝部に

賈 市也。从貝。𠂔聲。一曰坐賣〔售〕也。

とあつて、售字が衍文ならんとは、諸家の一致せる説である。段玉裁は更に進んで、售字を含む一句、六字全體を後世淺人の妄加であるとしてゐる。それは兎も角として、説文は賈の音を𠂔の聲としてゐるが、𠂔は説文に

讀如𠂔。（注呼訝切）

とある如く、日本音カとなる。元來賈字には兩音があり、公戸切、音古なる時は商人、賣買を意味し、居訝切、音駕なる時は商品の代價を意味する。即ち𠂔を音符として讀めば、賈は代價の義となつて、價と全く同音同意である。このことは聽て、賈字は元來代價を第一義として造られたることを示すものに外ならない。

次に𠂔は單なる音符として、それ以上の意味なく假借せられたものであるか、或は又音符たると同時に、一種の意味を以て賈字の中に使用せられたものであるかを検討して見よう。𠂔は説文第七編下

𠂔 覆也。从門。上下覆之。（段注。下字𠂔門者自上而下也。𠂔者自下而上也）

とあつて、𠂔は上下より蔽ひ包むの意味である。漢儒の深遠なる解釋を離れて、最も平凡に上下より蔽ふものとは何ぞやと考ふるに、それは結局、袋の如きものか、若しくは飯盒の如き容器に外ならぬであらう。

此處に於いて吾人は賈字の成立に對して、𠂔は若干の意味を以て附加せられたるものならんとの想像に達する。

抑も賈の意味する品物の代價とは、更に具體的に云へば、商品と交換して與へらるゝ貨幣そのものゝ謂である。然らば賈字は賣買に際して與へらるゝ貝貨そのものが、袋などの容器に入れられたる形ではなきか。羅振玉氏の殷墟書契卷六第三十二葉及び第三十三葉に、
 𠄎の如き書契を含む龜版を載せ、書契考釋第七十葉には之を解して

象裏貝形

となす。形の上より云へば賈字と甚だ相似たるものと云ふ可きであるが、金石學に對して全くの門外漢たる余には果して之が賈字の古形なりや否やを斷定することの出來ぬを遺憾とする。

三

上述の如く賈の音は𠄎より出で、代價を意味するが、若しそれが賣買或は商人を意味する時は音古となる。而して後世にては寧ろ音古なる時の商人の意を以て賈字の本義の如く解するも、賈が姓氏として、或は積、價の如く他字の音符として用ゐられたる時に、音𠄎を保存し居るを思へば、𠄎音に讀むが古くして、古音に讀むは第二義なることは疑ふ可くもない。果して然らば、商人の意味としての賈の原義を尋ねんとすれば、吾人は暫く、賈なる字形を離れて、賈の表はす音古なる言葉の緣由を、一應探求して見なければならぬ。

尤も賈の有する古なる音は、𠄎の音と相近ければ、𠄎が轉訛して古となつたと、極めて無難作に説明出来るかも知れない。然るに吾人は商賣の意味を有する文字としては、賈の外に古字を含んで音符とする一連の文字群、沽、估、酤などを有し、此等の文字は單に賈字の假借として用ひらるゝものではない。特に酤字は古音を表はす

文字として獨立の地位を有し居り、この點より見て商業を古の音にて呼ぶは遠き淵源を有するものなることを思はしむるものがある。

沽字は元來水流の名であるが、それが賈字と同じ用ひらるゝことは古くより認められ、論語の中に見ゆる

子罕第九。求良賈而沽諸。

の句中、沽字は漢の石經には賈字を用ひてゐるといふ。

估字は説文にも出て居らぬ文字なれば、恐らくその成立が比較的新しいものであらう。爾雅釋言の注中に商估といふ字が見ゆるさうであるが、自分は未だ檢出し得ない。若しそれが眞實としても、注は晋の郭璞の作なれば餘り古いものではない。

古字を含んだ文字として外に、賣買の意味に用ひられたであらうかと推測さる可きものに、居字がある。居字は現今では斤於切、音車となつてゐるが、古代に於いては、音符として有する古の儘の音であつたらうと思はれる。説文第八編上尸部に

居 蹲也。古者居从古。

とあり、この意味が明瞭でないので、段玉裁は之を改め、

从尸。古聲。(注。各本作古者居从古。乖於全書之例。淺人因下云俗居从足。而竄改譌謬耳。今正。)

としてゐる。更に朱駿聲の説文通訓定聲には居字の條に、

〔段借〕又爲鋼。呂覽園道。人之竅九。一有所居則八虛。

〔聲訓〕莊子齊物論。何居乎。司馬注。猶故也。

の例を挙げ、居が鋼、故に通用せられたるを指摘してゐる。而して余は更に居が沽に通じて用ゐられたるならんことを推測するものである。

商子農戰第三に、農業を去つて、兵役に服せざる遊民三種を挙げ、學者、商賈、技藝を數へたる後

故曰。農戰之民千人。而有詩書辯慧者一人焉。千人者皆怠於農戰矣。農戰之民百人。而有技藝一人焉。百人者皆怠於農戰矣。

と云ひ、學者、技藝の士が遊食して、戰士の意氣を沮喪せしむることを述べてゐるが、不思議に此の中に、商賈が出て來ない。然るに其の次の段になつて、

故曰。百人農一人居者王。十人農一人居者強。半農半居者危。

といふ文句が見ゆる。若し居を安居と解し、學者、商賈、技藝の三者を總括するものとすれば、明かに前文と矛盾する。この場合居者は、三者の中にて既に前出せる學者、技藝の二者を除き去りたる商賈のみを指すに相違ない。即ち、學者や技藝は百害あつて一利なきものなるが、商賈は或程度迄必要なるを認めたので、只その農民に對する割合が、百分の一乃至十分の一に止まる可きことを説いたものである。果して然りとすれば、商賈の意味に用ひられたる居者の居は沽と同じく、商ふの意味に相違ない。前文中にて居者と讀んで始めて前後の撞著を免れ得るであらう。

史記に陽翟の大賈呂不韋が邯鄲に至りて、秦の王子子楚が趙に質となり居り、秦趙交戰の爲に禮遇を受けず、車乗も備はらざるを見て、奇貨可居と云つたのは有名な話である。之は普通に奇貨なれば値段の出るのを待つ可しといふ風に解するが、未だ自己の掌中にあらざるものを、保管せんといふも可笑しい。この所矢張、奇貨居

ふ可し、掘り出し物なれば逃すまじといふ意味に取る方が適切であらう。

猶史記貨殖傳に左の句があり、

貨勿留。無敢居。貴。論其有餘不足。則知其貴賤。

第二句を以て、普通に貴き物を積貯し置く勿れと注するが、それにては上文第一句の、貨は留むる勿れと重複する。この所矢張、敢て貴を居^カふ勿れと讀むに如かず。敢てとは冒險の意なれば、値段の高き物を冒險して沽ふこと勿れとなつて文意暢達し、更に下文への連絡も貫通する。更に史記張湯傳に

湯且欲奏請。「田」信輒知之。居^カ物致富。與湯分之。

とあるは、張湯が御史大夫となり、白金や五銖錢を造り、或は鹽鐵の專賣、告緡令などの重要な政府の經濟政策に關係し居る間に、その祕密を田信に洩らして、物の投げ賣り若くは買占めを行はせたりとの意味であるから居物は、物を居^カひて云々と訓ず可きである。果して然らば論語憲問第十四に

士而懷^カ居。不足以爲士矣。

とある中の懷居は、居^カられんことを懷はゞと讀む可きではないか。尤も斯く解すれば、子罕篇の之を沽らん哉と矛盾するやうにも聞ゆるが、之を沽らん哉は、單に孔子がその弟子の材能ある者を推薦せんとの意味であつて、孔子自らを沽らん哉といふのではあるまいから、別に前後撞著の虞もないと思ふ。

尙書の解釋は甚だ六ヶ敷いが、益稷の

懋遷有無化居。

の中、化居一句、前の筆法にて行けば貨沽と讀み得る。貨賣の意味に取つた方が順當に理解される。

賈字には商業、商人の意味の外に、又商品といふ訓があり、詩經鄘風に

賈用不售

なる句がある。然らば居字にも亦商品の意味があつてよかりさうである。史記貨殖傳に

治産積居。與時逐而不責於人。

なる一句があるが、治産と積居と對句のやうに見ゆるから、之は産を治め、居シヤモを積みと對せしめて讀んだ方がよいであらう。

四

沽、估、居と同じ一群に屬する字に酤字がある。酉偏の示す如く主として、酒の賣買に用ひらるゝが、又廣く一般商業の意味にも使用され、或は沽字を以て代用さるゝ場合も少くない。この文字に就て特に注目さる可きはそれが多くの場合、酒字を伴ひ酤酒と連用さるゝことである。

論語鄉黨第十。酤酒市脯不食。

史記司馬相如傳。之臨邛。買一酒舍。酤酒。

史記滑稽列傳。王先生徒懷錢酤酒。

史記吳王濞傳。周丘者下邳人。亡命吳。酤酒無行。

漢書景帝紀。中三年夏旱。禁酤酒。

王褒童約。不約爲他家男子酤酒。

淮南子説林訓。酤酒而酸。買肉而臭。然酤酒買肉。不離屠沽之家。

など列擧すれば際限もない。而してこの場合、酤は賣る、買ふ、商ふ何れの意味ともなるのである。

酤酒なる熟字は斯く盛んに用ゐられてゐるが、之と全く同一の構造を有する熟字が鹽に就いて存在することを余は特に指摘したい。それは鹽鹽といふ語であるが、鹽は鹽字の省略に古字を加へたるもので、酤が酒字の省略に古字を附したると趣を同じくする。而してその下に、一は鹽、一は酒字を添へたものである。既に酤酒が酒を商ふの意味ならば、鹽鹽は鹽を商ふの意味になつて然る可きものと思はれる。不幸にして鹽鹽なる文字は史記の中に只一箇處出て來るのみで、漢書も亦同文を襲つてゐるに過ぎない。即ち史記貨殖傳に

猗頓以鹽起。而邯鄲縱以鐵冶成業。

とあるのがそれである。諸の注家は何れも鹽を以て河東の鹽池、若くは同鹽池より産する粗製鹽と解する。併しこの場合、鹽鹽は下の鐵冶に對して居れば、鐵冶が營業なる如く、鹽鹽も亦、鹽を販賣するの業として解するを得れば更に順當なるを覺ゆる。而して古音を有する文字が多く商賣の意を有し、且は酤酒と全く同一様式の構造を有するのであるから、鹽を鹽^{アキナ}ふと讀むこと必ずしも不可能ではあるまいと信ずる。

五

若しも鹽字に賣買の意味ありといふことが認めらるゝならば、此處に吾人は、何故に古の音が賣買を意味するかの問題を解決し得可き關鍵を得たるものである。何となれば鹽は賣買を意味する前に、その賣買せらる可き特定商品の意味を既に有してゐたからである。

鹽字の原義は河東鹽池、後世の所謂解州鹽池より産する粗製鹽の謂であらう。而してその音符古は苦と同じく鹽鹹き意味と思はれる。苦の本來の意味は、

爾雅釋言。鹹苦也（郭注。苦即大鹹）

とある如く、鹽の舌を刺戟する鹹味のことである。河東鹽池産の鹽は古代に於いて、所謂中原地方の重要部分を以てその消費區域としたであらうこと、後世の例よりしても推測出来るが、史記貨殖傳に

山東食海鹽。山西食鹽鹵。領南沙北。固往往出鹽。

とある、山西の鹽鹵は即ち解州鹽池の鹽のことに違ひない。而して此處にいふ山東と山西は、太行山脈を以て境したる用法に従つたので、

史記晉世家。文公四年十二月。晉兵先下山東。

の山東とそれに對する山西とである。太行山脈を以て海鹽と解鹽とが消費區域を分つてゐたとすれば、古代の重要都市は概ね解鹽消費區域に包含さるゝ譯で、史記貨殖傳に所謂

昔唐人都河東。殷人都河内。周人都河南。夫三河在天下之中。若鼎足。王者所更居也。

と云はるゝ三河地方全體を包括する。而して鹽は如何なる時代に於いても生活の必需品であり、寧ろ生活程度の低き時代程、夫れが消費經濟の中に於いて占むる位置が重要であつたと思はるゝ。漢代に至つて、所謂鹽鐵の議が起るを待たず、鹽は歷世、最も重要な商品であつた筈で、唐虞以來、夏王朝迄が山西南部に都したることが事實とせば、そは其經濟的地盤を鹽池の利に據りたるならんと想像される。

既に池鹽、即ち鹽が最も重要な商品なりとすれば、之に従つて鹽字及び鹽音に賣買の義が生ずるは最も自然

の推移である。賣買に際して手渡しさるゝ品物より、賣買の行爲を指す言葉が発生したる好適例を、吾人は賣買なる語そのものの中に見出す。即ち賣、買二字何れも貝の音にて、貝は交易の際に手渡しさるゝ貝貨に外ならぬ。貝貨の代りに鹽が渡さるゝ時に、その行爲が鹽を以て呼べる可きは、又極めて自然なる現象である。依つて余は古の音に賣買の意味が生じたるは、鹽より始まり、鹽に於いて確定し、それより漸次他の商品に及んだものであると想像するのである。

説文には鹽を以て直に鹽池と解する。第十二編上鹽部

鹽 河東鹽池。袤五十一里。廣七里。周百十六里。从鹽省。古聲。(公古切)

とあるが、前述の如くこの文字は苦^カを意味する古を音符とすれば、鹽が第一義にて、鹽を産する池はその延伸であらう。鹽池の傍に鹽に因んで苦城なる地名あり

潜夫論志氏姓。苦成城名也。在鹽池東北。

苦と鹽と相通することに依つても、鹽は鹹き鹽の意なりしことを知る可きである。

六

沽、居、酤など一群の、古字を音符として有する文字が存在して、それが賣買の意味を有することは、單に賣字と同音なるよりして、臨時それに假借せられたものではないことを示す。此等の文字は寧ろ、鹽字を中心として發達したるものであり、後に至つて商業の普遍化と共に、一般商人階級の勃興を見るに及んで、特種商業を意味する鹽字は次第に忘れられ、別に何商品とも指定せざる、居、沽字が多く用ひらるゝに至つたものと思はれる。

而もその發音に於いては依然として普通りの鹽の音を用ひ來つたものである。

之に對して賈は元來代價を意味し、その發音は𠂔^カによつて示され、意味も音も、沽の系統の字とは別であつたと見ゆる。それが如何にして、沽字と通用せられ、後に至つては恰も沽字の本字の如くに思はれ、𠂔字が反つて假借の如く考へらるゝやうになつたであらうか。

思ふに賈の別形に𠂔、又は𠂔なる文字があり、篇韻及び集韻に見えてゐる。而して之は賈の或字となつてゐるがこの𠂔字こそは、商人を意味する本字ではあるまいか。即ち本來は賈と賈とは別字であり、賈は代價を意味し賈は沽、居の一群に屬する字で、同様に商業、商人を意味したものであらう。後世字形の類似したるより、兩者を混同し相通じて用ひ、𠂔て又賈字のみを専ら用ひて賈字が廢せられてより、𠂔の音符を有する賈字を以て、恰も最初より古と讀みて商業を意味したるか^カの如く誤り考へらるゝに至つたものと思はれる。さればこそ賈字は、現今も猶、商業、商人を意味する時に限り、古の音にて讀まれ、夫が姓氏としての個有名詞に、或は他字の音符として𠂔、價の中に入りたる時は、依然として本來の音𠂔^カを保存してゐるのである。

七

商と賈は廣く賣買の行爲、及びその業者を指すに用ひらるゝが、或は行販を商、坐販を賈と區別する説が行はれる。その最初は恐らく班固の白虎通卷三に

行曰商。止曰賈。

と云へるもので、以後の學者は多くこの説を採用するが、商字が行販を意味するは無難として、賈字は實際の用

例に就いて見るに、必ずしも坐販を意味して居らぬやうである。既に尙書の酒誥に

鑿牽車牛。遠服賈。

とあるは、車牛を引連れたる大カラヴァンを聯想せしむるではないか。論語の待賈の賈は商賈であるか代價であるか不明であるが、若しも商賈の意ならば、之はその到來を孔子に待望されてあるものなれば坐賈ではなくて行商でなければならぬ。史記呂不韋傳に

呂不韋者陽翟大賈人也。往來販賤賣貴。

とある大賈人呂不韋も行商であつた。更に史記には行賈なる文字も見え

貨殖傳。賈貸行賈。徧郡國。

などゝある。果して然らば賈字には別に坐賈の意味なく、只商字が特に行商を意味するよりして、坐賈にも非ず行商にも非ざる賈字を拉し來つて強ひて之を坐賈として相對立せしめたるもので、例の漢儒一流の常套手段であらう。事實、賈字が鹽の賣買より出でたるものならば、鹽商は必ずしも坐賈に限りたることでなければ、斯かる區別が成立つ筈もないと思はれる。

以上余の所説を要約すれば、商賈の賈は元來商品の代價を意味するもので、商人の意味を有したものでなかつた。古代支那の商業に於ては古き商品として河東解州産の池鹽があつて、その味苦きによつて鹽とよばれ、それが當時の中原全體に供給さるゝ最も重要な商品なるより、先づ鹽の賣買が鹽を以て呼ばれ、次に一般商品、商業行爲も鹽と名付けられ、沽、居の文字を以て代用され、又別に酤の如き文字をも生じてそれが主として酒に關し

て使用さるゝことゝなつた。總て商業の流行、特に貨幣經濟の侵潤、商人階級の擡頭は、貝偏を有する貼、若くは賁字を生じ、之を以て商業、商人を意味する文字として用ひたが、字形の相類するより賁と混同され、遂には賁字が廢して賈字のみ専ら使用さるゝに至つたものである。賈字が一形にして二音二義を有するは、原義の延伸せるに非ずして、それが賁字を合併せし結果によるものであらう。

漢 口 通 信

日 比 野 丈 夫

○七日漢口着、一週間滞在。今日は武昌に泊ります。武漢三鎮大概の所は見えて廻りました。かつて松浦嘉三郎氏も訪ねて行かれた武漢第一の物知りといふ程明超先生（今は政府の參議）に逢つて色々話をきゝました。熊會貞さんの死に就いても今まで知らなかつた不思議な話を知りました。心配してゐた「水經注疏」も果して行方は知れず、おそろく重慶へ行つてゐるだらうとの事でした。楊守敬の故宅も殆ど破壊されてゐる様です。（三月十四日武昌にて）

〔編者附記〕熊會員は楊守敬のコレボレーターで楊氏の歴史地理方面の研究は熊氏の援助に俟つ所が少くない。楊氏の死後は専ら「水經注疏」の完成に専心してゐた。

詳しくは東方學報京都第七冊所載松浦氏「熊岡之翁の追憶」参照。

○船で岳州へ参りました。町の荒れてゐるには困りましたが岳陽樓や呂仙亭なども一通り觀ることができました。二泊して今朝岳州から引返し蒲圻に來ました。山ばかりの間を通過つて始めて稍々廣い盆地となります。驛から町まで少し路程がありますが實に景色がよく大原や鞍馬あたりを髣髴させます。低い城壁の西と北を取巻いて陸水の流があり東と南には山が迫つてゐます。城内には之と言つて見るべきものありませんがこの緑の山と青い水はいつまでも忘れられぬでせう。（三月二十二日 蒲圻にて）